

## 特集論文

# < début / mi- / fin + MOIS > の生成 : 構文化の観点から < *début / mi- / fin* + MOIS > du point de vue de la constructionnalisation

藤 村 逸 子 (Itsuko FUJIMURA)

Ce travail s'intéresse à la formation diachronique de 4 types de constructions constituées avec au moins une expression de PÉRIODE : *début / milieu (mi-) / fin* et un nom de MOIS. Nous les analysons du point de vue de la constructionnalisation (TRAUGOTT & TROUSDALE : 2013) en nous basant sur l'observation d'environ 20 000 données recueillies dans Frantext (du XIX<sup>e</sup> au XXI<sup>e</sup> siècle) et dans le journal *Le Monde* (1988, 1994, 2000, 2006, 2012). Il apparaît que la construction orthodoxe : <Prép + *le/la* + PÉRIODE + *de* + MOIS> (*au début de janvier*) s'emploie de moins en moins et que la construction <Prép + *le/la* + PÉRIODE-MOIS> (*à la mi-janvier, depuis la fin janvier*), dans laquelle *début* et *fin* sont préfixés par l'analogie avec *mi-*, augmente en nombre d'occurrences. La construction la plus fréquemment employée aujourd'hui consiste en < PÉRIODE + MOIS > (*début janvier, mi-janvier*). Elle résulte de la constructionnalisation procédurale qui change la fonction grammaticale de l'expression en adverbial. La construction <Prép + PÉRIODE + MOIS> (*dès fin janvier*) se forme enfin par l'analogie avec <Prép + Adverbe de Temps> (*dès aujourd'hui*). Nous observons ainsi la possibilité d'expansion de ces constructions dans plusieurs directions, comme *dès début 15<sup>e</sup> s, mi-2016* etc.

キーワード : lexicalisation (語彙化), 文法化 (grammaticalisation), 准接辞 (affixoïde), 通時態 (diachronie), 共時態 (synchronie), 類推 (analogie), ネットワーク (réseau)

## 1. はじめに

フランス語の2つの名詞の連続からなる複合語：Nom1+Nom2 (N1N2) には種々のタイプのもが含まれている。本稿はそのうち、月、年、季節、世紀などの上期（上旬）・中期（中旬）・下期（下旬）（以下では PÉRIODE）を示す表現を研究対象とする。fin janvier, mi- 2017<sup>1)</sup>, dès début 15<sup>e</sup> s. などがそれにあたるが、ここでは特に、月名（以下では MOIS）とともに使用される場合を観察する。次の (1) から (6) は、「月の下旬 (fin を含む表現)」を表す例であり、Frantext の分類の Roman の中から最近のものを採取した。

- (1) Il leur annonça (à eux, assis autour de lui comme autour d'un conteur) pour la fin d'avril, l'arrivée d'un Packet. (CHAMOISEAU, P., *Texaco*, 1992)
- (2) Cette correspondance de la fin juin évoque, en quelques lignes, ma séparation, qualifiée de temporaire, d'avec Marina, ... (PERRUT, D., *Patria o muerte*, 2009)
- (3) Je me disais parfois que je n'irais pas avant plusieurs semaines, quand j'aurai un dimanche de libre vers fin novembre. (ANGOT C. *Rendez-vous*, 2006)
- (4) A la fin de juin 1974, Arlette et moi partons avec trois des Mirabelles pour le Midi. (ARNAUD, C., *Qu'as-tu fait de tes frères?*, 2010)
- (5) — La plage en octobre ? — Qu'est-ce que tu crois, Français ? Que la plage on la démonte à la fin août, quand les gens de chez vous ils rentrent de vacances ? (JENNI, A., *L'art français de la guerre*, 2011)
- (6) Fin octobre, il donna à Auschwitz l'ordre de cesser de gazer les Juifs, et fin novembre, déclarant la question juive résolue, ... (LITTELL, J., *Les Bienveillantes*, 2006)

下線部は、それぞれ以下の形式に対応している。例 (1) = ① <前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + de + MOIS>, 例 (2) = ② <前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + MOIS>, 例 (3) = ③ <前置詞 (à 以外) + PÉRIODE + MOIS, > 例 (4) = ④ <à + le/la + PÉRIODE +

---

1) mi- は N ではなく接頭辞であるが、文法カテゴリー間には連続性があると考えられる構文文法 (後述) のテーゼに基づき、ここでは Nom と表示する。

de + MOIS>, 例 (5)=⑤ <à + le/la + PÉRIODE + MOIS>, 例 (6) = ⑥ <PÉRIODE + MOIS>. ①と②の間, 及び ④と⑤の間の形式的差異は, PÉRIODE と MOIS の間の de の有無である. ②と③の間の差異は PÉRIODE の前の定冠詞の有無である. ⑤と⑥の間の差異は, ⑤に存在する <à + 定冠詞>が⑥には存在しない点である.

本稿は, これらの表現の生起を大規模コーパスのデータに基づき通時的に記述し, それぞれの形式が生成される仕組みを明らかにすることを第1の目的とする. この過程において, 通時の変化は徐々におこるものである以上, 共時的な多様性と同値であることが明らかになる. 本稿はまた, この現象を構文化 (costructionnalisation) の観点に基づいて説明することを第2の目的とする<sup>2)</sup>.

以下ではまず, 対象とする N1N2 を2節で概観し, 3節では記述の枠組みとなる構文化について解説する. 4節では本稿で使うデータに関して説明する. 5節ではデータからの観察の結果を提示し, 6節において構文化の観点からの解釈を示す.

## 2. fin janvier 型の N1N2

fin janvier のタイプの N1N2 の表現は使用頻度が極めて高いが, これらを主たる対象にした研究は管見の限り存在しない. N1N2 についての主要文献である NOAILLY (1990) は, この種の表現を N1N2 の4つのタイプ<sup>3)</sup>のうちの Complémentation に分類してはいるが, 特殊であるとして簡単に触れているのみである (1990 :114)<sup>4)</sup>. フランス語はゲルマン諸語や日本語に比べて Complémentation のタイプの N1N2 の複合語は形成されにくい. N2 が N1 を形容し, 複合語の指示対象が1つになる qualification のタイプはロマンス諸語の特性として, 比較的容易に形成されるが (ex. mot clé(キーワード), femme enfant(子供のような女 (ロリータ)), vêtement sport(スポーティな服装), discours fleuve(長い演説)), 指示対象が2つの Complémentation のタ

2) 本稿では主にアナロジーのファクターを考察するが, 変化途上の各時点における意味的・機能的ファクターの作用を否定するものではない.

3) NOAILLY (1990) による区分は Qualification (*homme clé*), Coordination (*hôtel-restaurant*), Identification (*la catégorie adjectif*), Complémentation (*bébé éprouvette*) の4つ. Complémentation は N1N2 のそれぞれの N が別の指示対象をもつ.

4) NOAILLY (1990) は janvier などの月の名称は冠詞を伴わず, 普通名詞ではなく固有名詞であると注で述べている. mois や année などの普通名詞は, 確かにこの構文に入らない (\*début mois, \*fin année) が, 季節名は冠詞を伴うこともでき, また fin été などの表現も可能である. 注18に挙げた例を参照.

イブの複合語は自由に作れるわけではない。

FRADIN (2009) は NOAILLY の Complémentation タイプを Subordinate タイプと呼び、このタイプの特徴の1つとして2つのNの間に前置詞を挿入できる点を挙げている (ex. stylo à bille/ stylo-bille)。FRADIN (2009) のこの特徴づけは統語論的な派生関係を想定したものであると ARNAUD (2015) は分析し、FRADIN の Subordinate タイプ<sup>5)</sup> の N1N2 は、間に前置詞を挿入できるものばかりではないこと (portrait robot (合成顔写真))、また、前置詞の挿入されたものとされないもの間に大きな頻度差がある場合があることを述べ、この派生の考え方に疑問を呈している。筆者が Le Monde<sup>6)</sup> を用いて行った調査結果によると (FUJIMURA : 2016)、N1 と無冠詞の N2 が結合する場合にトークン頻度が圧倒的に高いのは、N1deN2 であり (約 130 万件, ex. chiffre d'affaires, point de vue, taux d'intérêt)、2位の N1N2 はその10分の1以下である (約 10 万件, ex. dimanche soir, assurance vie, pays membres)。また、FRADIN (2009) の予想に反して N1N2 と N1deN2 の交替が確認できたものは極めて少数に過ぎない (ex. centre (de) ville, service (d')Internet, station (de) service, appareil (de) photo, allocation (de) chômage)。de の挿入と削除をゆるすこのタイプのものの中で、トークン頻度が高くデータから有意な結果を引き出しやすいと思われるのが、本稿で対象とする fin (de) janvier, début (de) janvier, fin (de) 2017, début (de) 2018 などである。上掲の例文の中では、(1) と (4) が N1deN2 に当たり、(2),(3),(5),(6) は N1N2 に当たる。本稿では、この現象は FRADIN (2009) が言うような de の脱落現象ととらえるよりも、以下に述べる構文化の観点から説明するのが妥当であることを、データに基づき主張する。

フランス語における N1N2 の近年の増加については英語の影響がよく話題にのぼるが (NOAILLY : 1990, PICONE : 1996, ARNAUD : 2015)、本稿が対象とする N1N2 に関しては、その calque (翻訳借用) のモデルとなる表現は英語には存在しない。英語では in early January, in mid January, in late January, または at the beginning of January, at the end of January という。

début, mi-, fin は、現代フランス語では1つのパラディグムを構成しているかのようであるが、出自はそれぞれ異なっている<sup>7)</sup>。fin は10世紀後半からの出現が確認できる古い語である。début は dé- と but の語彙化により16世

---

5) ARNAUD (2015) の用語では Relational Unit.

6) 1988 から 2012 年までのうちの5年分。総語数は約1億語。詳細は本文4.1に掲載。

7) 以下の記述は Trésor de la langue française informatisé と Petit Robert (2011) による。

紀に作られた *débuter* に由来する新しい語である。ゲーム用語としての用例が初出 (1642 年) であり、本研究の対象の「何かの始め」の意味での初出は 1674 年である。mi- はラテン語の形容詞の *medius* に由来する接頭辞で、古フランス語期から用いられている。mi- は種々の語に接続するが、時を表す名詞に接続すると名詞は女性名詞になり冠詞の *la* が前置される。GREVISSE & GOOSSE (2008 : § 476) によると、古フランス語では mi-MOIS は男性名詞であった。女性名詞に変化した理由の可能性の 1 つとして *fin* が女性名詞であることの影響が指摘されている。mi- は *fin*, *début* とは異なり拘束形態素であり名詞としては使用できないので、本稿においては対応する名詞として *milieu*<sup>8)</sup> を観察する。以下において mi- と *milieu* の両者を指す意図のある場合には MID で示す。

### 3. 構文化 (constructionnalisation)

構文化 (constructionnalisation) は構文文法 (Grammaires de Construction) の枠組みの中で、構文 (Construction)<sup>9)</sup> の生成を扱う通時的モデルであり、TRAUGOTT & TROUSDALE (2013) をその主要文献とする<sup>10)</sup>。

構文文法は生成文法に対抗するモデルとして主としてアメリカで盛んであるが、生成文法のような強固かつ綿密に練り上げられたモデルではなく、基本的枠組 (GOLDBERG : 2006, GOLDBERG : 2013) を共有しつつも複数の分派から成るゆるやかなモデルである。分派についての解説は FRANÇOIS (2008) が詳しい。構文化モデルはそれらの分派のうちで、言語の変化・生成は言語使用の中で生じるという使用基盤・用例基盤モデル (BYBEE : 2010) に基づき、また、言語の多様性を射程に収める (CROFT : 2001)。

構文文法における「構文」とは、形式と意味とのペアリングからなる記号であると定義され、ソシュールの記号と同等のものであると繰り返し説明されている (HOFFMANN & TROUSDALE (2013 : 1))。ソシュールの記号は一般に、1 語からなる語彙素 (「犬」など) に対応すると認識されているが、「構文」は 1 語や 1 形態素 (atomique) のものから、複数の語彙素や文法要素からなるもの (complexe) までを含む。空の要素 (特定の語ではなく、語彙クラスが

---

8) *milieu* は *mi-lieu* に由来するので当然ながら mi- よりも新しい語であるが、初出は 12 世紀であり、*début* よりはずっと古い語である。

9) Construction は「文」の概念とは関係がないため、日本語の訳語が「構文」であるのは誤解を生みやすく不適切である。しかし、日本語における「構文文法」や「構文化」に関する著作 (秋元他編 : 2015, 天野 & 早瀬編 : 2017) にならい、本稿ではこの訳語を使う。

10) 秋元 (2015) にすぐれた解説がある。

指定されている) からなる構文もある (GOLDBERG (2013 : 17) LEGALLOIS (2016)). 本稿が扱う <début/mi-/fin + MOIS> はこの最後のタイプに当たる。<début/mi-/fin + MOIS> 構文は、MOIS をさらに、「年 (数字)」、「季節」、「世紀」などに拡張が可能なので、構文文法の扱う構文として典型的と考えられる。構文は普通の文法ルールでは説明のつかない語または語の連続、および高頻度の語または語の連続が該当する (GOLDBERG (2006 : 5)). 構文文法の主張の中で本稿にとって重要な考え方は、構文は全体を 1 つのまとまりと考え、その内部要素の組み合わせからなるとは考えないこと (LEGALLOIS : 2016), 1 語からなる構文と複数の要素からなる構文の間は連続的であること (すなわち、語と句の間に境界を設けないこと) (BOOIJ (2010 : 19), CROFT (2001 : 16-17)), 文法カテゴリー (たとえば、名詞、形容詞、接辞) の間も連続的であること (CROFT (2001 : 63-107)), 語彙的要素と文法的要素の間も連続性があることなどである。語彙的要素と文法的要素が連続的であるとの認識は、文法化と語彙化が連続的であるという認識に必然的に帰結する (TRAUGOTT & TROUSDALE (2013 : 27-28), 秋元 (2015 : 23)). 構文化モデルにおいて、従来の文法化は「文法的構文化」または「手続き的構文化」と呼ばれる。従来の語彙化は、「語彙的構文化」または「内容的構文化」と呼ばれる。また、複数の構文はネットワークを構築し、構文同士は互いに影響しあう (GOLDBERG (2013), LEGALLOIS (2016)).

TRAUGOTT & TROUSDALE (2013) は、構文化 (constructionnalisation) と構文変化 (changement constructionnel) に別の定義を与えている。構文化は形式と意味の新しい結びつきによる新しい構文の生起である。構文化は構文変化が積み重なって起こるとされる。構文変化には、意味は変わらず形式だけが変化する場合と、形式は変わらず意味だけが変化する場合とがある。この考え方は、形式と意味は一対一の関係にあるわけではないという前提に基づいていると考えられる。言語は常に変化する以上、ある共時的な時点において種々の構文は常に変化の途上である。複数の変化途上の形式が同じ意味を表す異形同義語や、同じ形式が複数の変化途上の意味を表す同形多義語の入り交じる多様性に満ちた状態が言語状況であるということになる。

フランスでは構文文法について、上掲の FRANÇOIS (2008) ののち最近の

くつかの出版がなされ、注目されている<sup>11)</sup>。

## 4. データと方法

### 4.1. コーパス

本研究において資料として用いるのは、次の2つのコーパスである。

➤ Frantext intégral

<https://www.frantext.fr/>

テキスト数：5350 (2018.11.26 現在)

総語数：251,243,880

時期：1120-2019

➤ Text corpus of « *Le Monde* » 1988, 1994, 2000, 2006, 2012

<http://catalog.elra.info/en-us/repository/browse/ELRA-W0015/>

ELRA が配布

総語数：約1億語

Frantext には12世紀から現在までのデータが含まれ、言うまでもなく通時的研究に適している。*Le Monde* は近年25年間、6年間隔の同質のデータである。研究対象によっては25年間では変化が観察できない場合も多いが、本稿のテーマについては興味深い変化が確認できた。

### 4.2. データの収集とデータベース化

データの収集は次の手順で行った。

(ア) Frantext はオンラインコーパスであるので、オンラインのツールを使って検索を行った。MOIS は、Frantext に単語リストとして備わっている MOIS を用いた。検索は、大文字と小文字の <fin/début/milieu de MOIS>, <fin/début/milieu d' MOIS>, <fin/début/mi-MOIS > で行い、コンテキスト、作者や出版年などのメタデータともにダウンロードして保存した。

(イ) *Le Monde* は市販のテキストファイルなので、検索と加工は Perl 言語によるプログラムを著者が自ら書いて行った。

検索対象は Frantext と同じものとした。コンテキストと発行年とともに、大文字と小文字の <fin/début/milieu de MOIS>, <fin/début/

---

11) *Constructions in French* (BOUVERET & LEGALLOIS :2012), *Langue Française* 誌の特集 (LEGALLOIS & PATARD :2017) がある。ウェブ上でも概論を読むことができる (LEGALLOIS :2016)。構文化については、VAN WETTERE & LAUWERS (2017) が発表されている。

milieu d' MOIS>, <fin/début/mi- MOIS > を検索した。

- (ウ) 検索結果をエクセルに Kwic 形式でデータベースとして保存し、データを手作業で分類し、不要例を削除した。
- (1) Frantext の genre の分類のうち、Correspondance は除外した。  
本稿のデータとなる手紙の作成時期の記載は、執筆時ではなく出版時における追記であったことによる。
- (2) Frantext のデータ中の 18 世紀以前の例 (計 286 例) は考察の対象としない。現代の使用とは乖離していると思われるからである。  
例えば début はこの 286 例中に 1 例も存在しない。
- (3) 1 節で提示した 6 つのタイプの連鎖 (séquence) (4.3 にも再掲) 以外の、以下の 4 つのタイプの連鎖は生起頻度が少なく例外的であるので本論文では扱わない。すなわち、前置詞を伴わない <PÉRIODE + de + MOIS>, <le/la + PÉRIODE + MOIS>, <le/la + PÉRIODE + de + MOIS> と、前置詞 à を伴い、冠詞のない <à + PÉRIODE + MOIS (à fin janvier)><sup>12)</sup> は対象外とした。Frantext では計 163 例 (全体の 4.3%)、Le Monde では計 200 例 (全体の 1.3%) である。
- (4) 最終的に本論文のデータとして、Frantext からは計 3821 例、Le Monde からは計 15913 例を得た。

### 4.3. 例

上述のように、本稿では変化の過程を構文の変化と考える。以下では 1 章で見た次の 6 種類の連鎖 (séquence) を扱う。カッコ<>の中にはそれぞれの連鎖の省略表現を示した。Frantext から採取した fin の例は 1 章で挙げた。Le Monde から採取した début と mi-, milieu の例を以下に挙げる。最新の年の例を挙げることを試みた。ほとんどは Le Monde 2012 において確認できたが、<au milieu de MOIS> は最新年が Le Monde 1994 であった。

①前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + de + MOIS <他冠期 de 月>

②前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + MOIS <他冠期月>

---

12) 対象外とした à は、時間軸上の 1 点を指定する機能のものに限っている。jusqu'à の à, de ~ à ~ 「～から～まで」の à, remonter à ~ など間接目的補語のマーカーの à などは、「à 以外の前置詞」のグループに分類した。時間軸上の 1 点を指定する à は冠詞とともに、<à + le/la + PÉRIODE + de + MOIS> と <à + le/la + PÉRIODE + MOIS> の形で多数使用される。また、後掲の (20) は対象外とした <le/la + PÉRIODE + MOIS> の例である。

- ③ 前置詞 (à 以外) + PÉRIODE + MOIS <他期月>
- ④ à + le/la + PÉRIODE + de + MOIS <à 冠期 de 月>
- ⑤ à + le/la + PÉRIODE + MOIS <à 冠期月>
- ⑥ PÉRIODE + MOIS <期月>

#### début

- (7) Pierre Moscovici, a annoncé une baisse des prix à la pompe dès le début de septembre en souhaitant un « effort partagé » entre l'Etat et les distributeurs. (LM2012) ①
- (8) Depuis le début mai, la cinquantaine de centrales de l'archipel est à l'arrêt, soit en raison du séisme. (LM2012) ②
- (9) C'est prévu pour début juillet, après le collectif budgétaire qui permettra de les financer. (LM2012) ③
- (10) Celui de Rotterdam a présenté au début de février une intéressante rétrospective de la nouvelle génération de cinéastes syriens ... (LM2012) ④
- (11) Mme Warren n'est passée devant qu'au début octobre. (LM2012) ⑤
- (12) Deux camps tout neufs de préfabriqués, d'une capacité de 20 000 lits chacun, ont ouvert début avril. (LM2012) ⑥

#### MID (milieu / mi-)

- (13) Il n'y pas a eu de discussions entre les administrations ni d'étude des mesures possibles au sein de l'un ou l'autre ministère avant le milieu de mars 1996... (LM2000) ①
- (14) A partir de la mi-mai 2011, Fabrice Paszkowski n'organise plus de « rencontres coquines ». (LM2012) ②
- (15) A la faveur du réchauffement climatique, la saison de navigation dans le Grand Nord russe s'est étendue de juin à mi-novembre<sup>13)</sup> cette année. (LM2012) ③
- (16) Quant aux centristes du CDS, en portant à leur tête François Bayrou, au milieu de décembre, ils se sont engagés sur la

---

13) 「まで」を意味する à は、「その他の前置詞」のグループに分類されている。(注 12 参照)

voie d'un destin autonome. (LM1994) ④

(17) Le Français Jean Marie Guéhenno, numéro deux de la mission, a jeté l'éponge à la mi-juillet pour rentrer en France. (LM2012) ⑤

(18) Le Fonds monétaire international (FMI) a décidé mi-septembre de contribuer à dynamiser les frémissements de cette reprise. (LM2012) ⑥

①と④のタイプの連鎖には言うまでもなく必ず名詞の milieu が出現するが、⑥のタイプにも、Le Monde (2000と2012) にそれぞれ1例ずつ ((19)と他1例) の例外的な milieu が確認できた。

(19) Le préfet de police « s'en est expliqué lors de son audition milieu décembre 2011 »... (LM2012)

以下に示すグラフにおいて②③⑤⑥の MID は、この例外的な2例を除き全て mi- である。また、mi- は必ず <mi- MOIS> の形をとる。

## 5. 通時的推移

本節では、Frantext と Le Monde における①から⑥までのタイプの連鎖の通時変化を百分率換算のグラフ表示によって観察する<sup>14)</sup>。

### 5.1. Frantext :19s-21s の変化

#### 5.1.1. à 以外の前置詞が先行する場合

図1はFrantextから採取した、①前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + de + MOIS (<他冠期 de 月>), ②前置詞 (à 以外) + le/la + PÉRIODE + MOIS (<他冠期月>), ③前置詞 (à 以外) + PÉRIODE + MOIS (<他期月>) のグラフである。

---

14) 以下で「多い」または「少ない」というのは相対的頻度における多少を意味している。実数における多少を意味してはいない。

図1 Frantext : à以外の前置詞

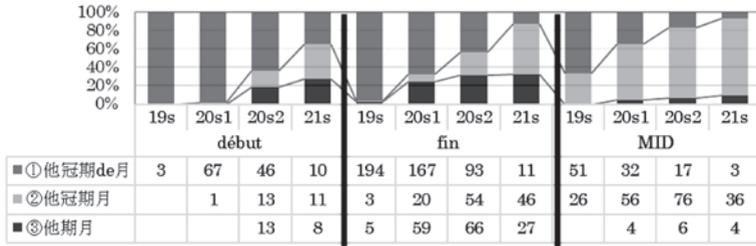


図1 では以下の点が観察できる.

- 変化には方向性がある.
- début, fin, MID (milieu) の全てにおいて, ①は減少する.
- début, fin, MID (mi-/milieu) の全てにおいて②と③は増加する. 特に②が増加する.
- début と fin は近似している. MID (mi-/milieu) は異なっている.
- début と fin は, ①の減少が著しい.
- MID の特徴は②が多いことであり, 21世紀では全体の84%に及んでいる.
- fin と début においても②は増加する. la mi-MOIS > la fin MOIS > le début MOIS の時間的順序で変化が拡大したと推定される.
- ③も増加傾向にある. fin > début の時間的順序で拡大したと推定できる.

### 5.1.2. 前置詞 à が先行するか前置詞なしの場合

図2は, 前置詞が à であるか, または前置詞がない場合である: ④ à + le/la + PÉRIODE + de + MOIS (< à 冠期 de 月 >), ⑤ à + le/la + PÉRIODE + MOIS (< à 冠期月 >) ⑥ PÉRIODE + MOIS (< 期月 >).

図2 Frantext : àまたは前置詞なし

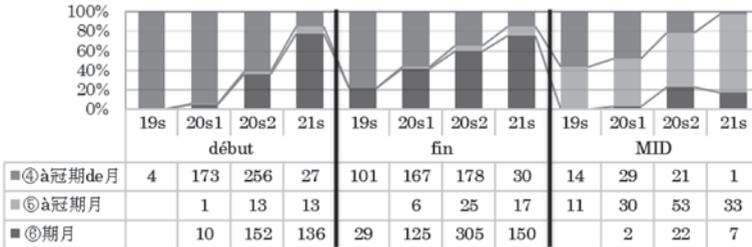


図2では以下の点が観察できる。

- 変化には方向性がある。
- début, fin, MID (milieu)の全てにおいて④は著しく減少する。
- début, finにおいて⑥は著しく増加する。
- débutとfinとは近似している。MID(mi-/milieu)は異なっている。
- MIDの特徴は⑤が多いことであり、21世紀では全体の80%に及んでいる。
- début, finにおいても⑤はわずかながら増加傾向にある。増加は、MID(mi-) > fin, débutの時間的順序で拡張したと推定される。
- ⑥は、fin > débutの順序で拡張したと推定できる。

### 5.1.3. 図1と図2の差異

図1と図2の異なる点は、débutとfinにおける②と③、⑤と⑥の間の頻度差である。à以外の前置詞が先行する場合(図1)、冠詞のある②(vers le début MOISやpour la fin MOIS)の生起は多く、冠詞のない③(vers début MOISやpour fin MOIS)と拮抗している。しかし、前置詞がàの場合には、àと冠詞のある⑤(au début MOISやà la fin MOIS)の生起は少なく、àも前置詞もない⑥(début MOIS, fin MOIS)に圧倒的に凌駕されている。②と⑤の違いは前置詞の種類である。àは高頻度のデフォルトの前置詞なのでほかの前置詞に比べて消失しやすいと考えられる。

一方、MID(mi-)の場合には前置詞が何であっても、②と⑤(前置詞+le/la mi-MOIS)は同様に増加傾向にある。⑤のà la mi-MOISが保持され、⑥のmi-MOISに移行しにくいのは、<la mi-MOIS>が<冠詞+接辞付きの名詞>として安定しているからと考えられる。<mi-名詞>の形式の構文がほかにも多数存在することに理由があると思われる。

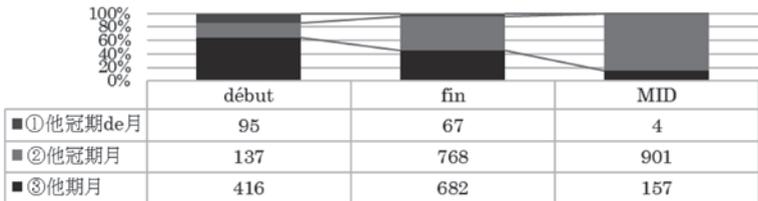
## 5.2. テキストジャンルの問題 (Frantext と Le Monde の比較)

次節で Le Monde における推移を観察するまえに、Frantext と Le Monde の間のテキストジャンルの違いが本稿の問題にどの程度影響するかを考える。この目的のために、Le Monde データ全体 (1988 年から 2012 年) を 1 つにまとめて①から⑥の連鎖タイプの頻度分布を図示し (以下、図 3 と図 4)、Frantext データのうち 21 世紀のものと比較する。以下にみるように、本稿で扱う問題に関する限り、Frantext の 21 世紀データと Le Monde データとは基本的には同質のデータと考えられることがわかる。

### 5.2.1. à 以外の前置詞が先行する場合

à 以外の前置詞が先行する場合の Le Monde データは図 3 の通りである。図 1 の Frantext の 21 世紀データとの比較により、連鎖②は MID (mi-) で圧倒的 majority を占め、次に fin において多く、début で最も少ないこと、①は début に多く、fin に少なく MID (milieu) では最も少ないことが共通しているのがわかる。連鎖③が MID (mi-) で少ないことも共通している。異なるのは début と fin における③である。Le Monde では début において最多であるが、Frantext では début と fin はほぼ同等である。

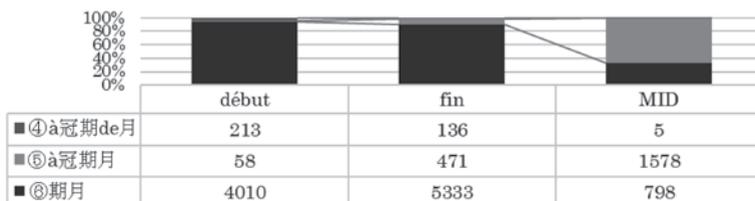
図 3 : Le Monde 1988-2012 : à 以外の前置詞



### 5.2.2. 前置詞 à が先行するか前置詞なしの場合

à が先行するか前置詞なしの場合の Le Monde データは図 4 の通りである。図 2 の Frantext の 21 世紀データとの比較により、全体的な傾向は同じであることがわかる。début と fin は⑥がほとんど全てを占め、MID (mi-) では逆に⑤が多い。

図4 Le Monde 1988-2012 : àまたは前置詞なし



### 5.3. Le Monde : 1988 から 2012 までの変化

Le Monde データは 1988 年から 2012 年までの 25 年間のインターバルに過ぎないが、本稿の対象に関して明確な変化の方向性を示している。

#### 5.3.1. à 以外の前置詞が先行する場合

図5 は à 以外の前置詞が先行する場合の変化を示す。

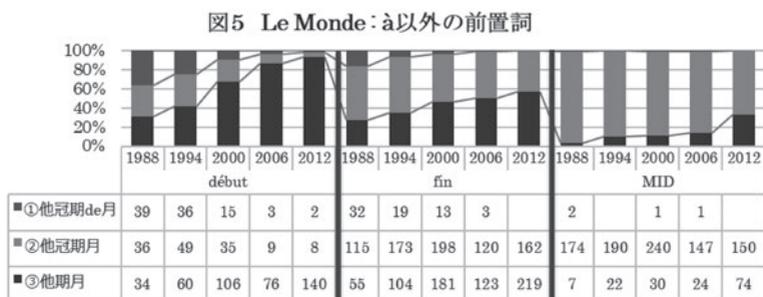


図5 では以下の点が観察できる。

- 変化には方向性がある。
- ①は減少が著しく 2012 年では début の 2 例があるのみである。
- 増加しているのは、début, fin, MID (mi-) とともに、③のみである。
- ③の増加は début において著しく、fin が中間で、MID (mi-) では穏やかである。
- début, fin, MID (mi-) の全てにおいて、②は③に押されて、減少傾向にある。特に début では減少が著しい。

#### 5.3.2. 前置詞 à が先行するか前置詞なしの場合

図6 は前置詞 à が先行するか、前置詞なしの場合の変化を示す。

図6 Le Monde : àまたは前置詞なし

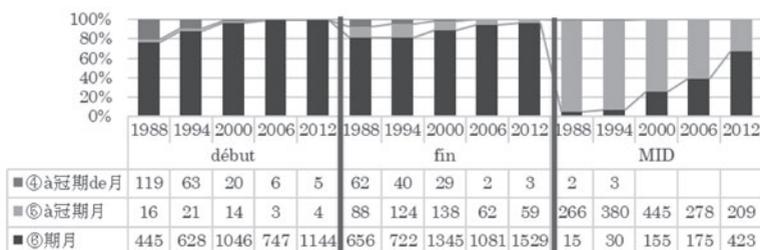


図6では以下の点が観察できる。

- 変化には方向性がある。
- ④は減少が著しく、2012ではほぼ消滅している。
- 増加しているのは début, fin, MID (mi-)ともに⑥のみである。
- ⑥は2012年に début と fin ではほぼ100%に達している (début :99.2%, fin :96.1%)。MID (mi-)でも60%を超えている。
- début, fin, MID (mi-)ともに⑤は減少傾向にある。début と fin では④と同様に消滅しようとしている。MID (mi-)も急速に減少している。この点で Frantext の傾向とは逆である。

### 5.3.3. 図5と図6の差異

図5と図6を比較すると、全体の変化の方向は同一であり、①②④⑤は減少し、③⑥は増加している。MIDでは図5と図6の形状は近い。①と④はほぼ消滅しており、②と⑤は減少傾向ではあるが保持されている。図6では、début/fin と MID (mi-)の間の大きな差が顕著であり、début と fin はほぼ⑥のみによって占められている。図5では début, fin, MID (mi-)の3区分となっている。今後②が減って③が増えることが予想できる。

### 5.4. Frantext と Le Monde の比較

Frantext データと Le Monde データの共通点と相違点は以下の通りである。

共通点：

- 変化には方向性がある<sup>15)</sup>。
- <前置詞+ le/la + PÉRIODE + de + MOIS > (①と④) は全データで減少している。

15) 唯一、図2のMIDにおいて部分的な逆転がある。

- début と fin の変化は似通っている。MID には別の特徴がある。

相違点：

- <前置詞+ le/la + PÉRIODE + MOIS > (②と⑤) は Frantext では増加し、Le Monde では減少している。
- Le Monde では début, fin, mi- の全てにおいて<⑥期月>が劇的に増加する。Frantext でも début と fin では<⑥期月>が大きく増加するが、mi- ではそうではない。

## 6. 構文化の視点からの考察

本節では、以上で行った観察を構文化の観点から解釈して示す。本稿が対象とする問題には次の4つの構文が関与している。すでにみてきたように、これらは一挙に入れ替わるわけではない（漸進性 (Gradualness)）ので、共時的にはヴァリエーション (Gradience) として共存することになる (cf. Traugott & Trousdale (2013 :74-75), 秋元 (2015 :22-24))。

1. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE + de + MOIS >構文
2. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE ((准)接頭辞) + MOIS >構文
3. <PÉRIODE + MOIS >構文
4. <前置詞+ PÉRIODE + MOIS >構文

### 6.1. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE + de + MOIS >構文

最初に、タイプ①とタイプ④の連鎖に対応するオーソドックスな<前置詞+名詞句>構文があった。この構文は PÉRIODE が début の場合に最も保持力があり、fin の場合が中間で、milieu の場合に最も早期に失われた。milieu の概念は fin や début に比べ漠然としている。前置詞が à の場合、この構文では時期の指定の厳密性が高い (à la fin de janvier は最後の3日程度の日数を指すが、à la fin janvier, fin janvier はより漠然として日数の範囲が広い) という意見がインフォーマントからあった。この意味的条件は milieu の早期の消失に関与している可能性がある。début や fin に比べて milieu を厳密に指定する必要性は少ないし、また指定は容易ではないからである。

### 6.2. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE ((准)接頭辞) + MOIS >構文

<前置詞+冠詞+ (准)接頭辞+ MOIS >構文は、図1から図6までの全てが示すとおり、mi- の場合に最も頻度が高く、安定的に使用されている。mi- は fin や début とは異なり当初より接辞である。<mi-MOIS >は名詞として扱われ、<前置詞+冠詞+名詞>という収まりのよい形式となる。

この構文内に入る fin と début は、mi- をモデルにしたアナロジーにより准

接辞化したと考えられる<sup>16)</sup>。前置詞がà以外の場合(図1と図5)も,àの場合(図2と図6)も, *mi-MOIS*, *fin MOIS*, *début MOIS*はこの順序の相似形を示している。*mi-MOIS*に近いのは*fin MOIS*である。*fin*が*début*よりも*mi-*に近いのは,1音節の女性名詞であるために語形と冠詞を*mi-*と共有する点と,古くから存在する語であることが関係していると思われる。このようにして形成された<冠詞+(准)接頭辞+名詞>は,圧倒的多数の前置詞と共起する使用のほかにも,(20)のように主語や目的語としても使われる。

(20) *Re-chambre. Comme la fin octobre sera dure, puisqu'elle signera la fin de nos relations avec l'arrivée de sa femme.* (ERNAUX, A., *Se perdre*, 2001)

名詞の接辞化のうちでこのようなタイプの内容語的意味を保ったままのものは,構文化の枠組みでは,語彙的構文化(*constructionnalisation lexicale*, または *contentful constructionalization* (英))と呼ばれる。古くから存在する*mi-*による語形成パターンが,アナロジーによって*fin*や*début*に拡大し,さらに,次に続く構文化の引き金を引いたと考えられる。

### 6.3. < PÉRIODE + MOIS > 構文

*Frantext*と*Le Monde*の両方において増加傾向が極めて顕著であるのは< PÉRIODE + MOIS > 構文である(例6, 12, 18)。この構文の増加の勢いは*début*と*fin*で特に著しく,*mi-*ではそれほどでない。

上述のように,*Frantext*と*Le Monde*では変化の方向に不一致が存在する。*Frantext*では,現代に近づくにつれて上記の<前置詞+冠詞+ PÉRIODE ((准)接頭辞) + MOIS > 構文が増加するが*Le Monde*では減少している。この方向性の不一致は,2つの構文は競合的な別の構文であると考えることにより説明がつく。言語変化には方向性があるが,必ずしも一方向であるとは限らないというTRAUGOTT & TROUSDALE(2013)のテーゼに合致するものである。

< PÉRIODE + MOIS > 構文の由来に関して本稿のデータから推定できるのは,上述した<前置詞+冠詞+ PÉRIODE ((准)接頭辞) + MOIS > 構文における*fin*や*début*の不安定な(准)接頭辞化のあと,電報的省略表現として昔から存在していた使用が構文化して用いられるようになったというストーリーである。

例(21)(22)は本稿のデータの中で最も古い,19世紀前半の< *fin* +

---

16) 准接辞化に関しては,BOOIJ(2010),BOOIJ & HÜNING(2014)参照。

MOIS >である。(21) では帳簿に記入する日付としての *fin mars* であるし、(22) では注釈メモとしての *fin octobre* である。

(21) Je te conterai cela ce soir. Célestin, inscrivez, fin mars, un billet de dix mille francs, ordre du Tillet. - Du Tillet ! répéta Constance frappée de terreur. (BALZAC H., *Histoire de la grandeur et de la décadence de César Birotteau*, 1837)

(22) Combien de mains, de cerveaux, supposez -vous à l'homme qui imprime Le Livre mystique chez Baudoin, du 21 novembre au 4 décembre, qui publie Le Lys dans la Revue, et La Fleur des pois (fin octobre) chez Mme Béchet ? (BALZAC H., *Le Lys dans la vallée*, 1844)

ARNAUD (2015) はフランス語の N1N2 の複合語と混同しやすいものとして (23) の例を挙げ、電報スタイル (Telegraphic style) と呼んでいる。(24) が正式の形式である。

(23) parking cars 200m

(24) parking des cars à 200m

筆者は < PÉRIODE + MOIS > 構文は一種の電報スタイルに由来していると考えている。現代フランス語のほとんどの < PÉRIODE + MOIS > は単に日付を表すのではなく、文中で状況補語の機能を果たす (例 6, 12, 18)。つまり、< PÉRIODE + MOIS > は 2 つの名詞の単なる連続ではなく、副詞句構文になっている。文法化、あるいは TRAUOGOTT & TROUSDALE (2013) に従い、文法的構文化 (constructionnalisation grammaticale) あるいは手続き的構文化 (constructionnalisation procédurale) と分析するのが適切である。

#### 6.4. <前置詞 + PÉRIODE + MOIS > 構文

最後に前置詞を伴う場合 (例 5, 11, 17) を扱う。この構文は < PÉRIODE + MOIS > 構文との関連で考察すべきである。2 つを Frantext で比較すると、< PÉRIODE + MOIS > 構文のあとで <前置詞 + PÉRIODE + MOIS > 構文が出現していることが見て取れる。また全体として、<前置詞 + PÉRIODE + MOIS > 構文は < PÉRIODE + MOIS > 構文ほどの勢いはない。

<前置詞 + PÉRIODE + MOIS > 構文は < PÉRIODE + MOIS > 構文に比して、文法的にはさらなる逸脱がある。

(25) En matière de canoë-kayak, la France ne manque pas de

possibilités : de début février à fin octobre, nombreux sont les plans d'eau où les concurrents peuvent se mesurer. (\*COLLECTIF, *Jeux et sports*, sous la dir. de Roger CAILLOIS : 2, 1967)

- (26) ...et je ne prévois guère que le volume puisse sortir avant mi-juin. (Du Bos, C. *Journal t. 3 (1926-1927)*, 1927)

これは副詞化された< PÉRIODE + MOIS >構文を土台に、hier → depuis hier, aujourd'hui → à partir d'aujourd'huiなどをモデルにしたアナロジーによって形成されたと考えられる。時の副詞のhierやaujourd'huiに、デフォルトの前置詞は付加されず、特別の意味の追加の場合にのみ前置詞が付加できることは、< PÉRIODE + MOIS >と同様の振る舞いである。上掲の(6)にàを付加した(27)は、à hierが可能でないのと同様に、可能ではない。

- (27) \*A fin octobre, il donna à Auschwitz l'ordre de cesser de gazer les Juifs, et \*à fin novembre, déclarant la question juive résolue,...(LITTELL, J., *Les Bienveillantes*, 2006) ((6)の改変)

構文化の一般的傾向として、長い語形が縮小すること、形式がスキーマ化、あるいはパラダイム化すること、生産性が高まることが指摘されるが (TRAUGOTT & TROUSDALE : 2013, 秋元:2015), これまでに観察したとおり、本稿の< PÉRIODE MOIS >構文はこの特徴があてはまっている。この構文の構文化には、mi- が引き金を引いた PÉRIODE-MOIS の語彙化 (<前置詞 + 冠詞 + PÉRIODE ((准) 接頭辞) + MOIS >構文で使われる) と、電報形式の日付表記に由来する副詞化 (< PÉRIODE MOIS >構文) の両方が関わっていると考えられる。前者は語彙的構文化 (語彙化) であり、後者は文法的構文化 (文法化) である。本稿の現象は語彙的構文化と文法的構文化の両者が関わった結果であると結論づけられる<sup>17)</sup>。

## 7. おわりに

本稿では début / milieu / mi- / fin と月の名称 (MOIS) を含む表現を対象とし、Frantext と Le Monde から取得した通時的データに基づき、構文の変化と各時期における共時的な状況を記述した。構文としては次の4つを認定した。

---

17) 文法化と語彙化の関係に関しては多くの研究が発表されている。 Cf. BRINTON & TRAUGOTT (2005), FAGARD & DE MULDER (2007), LAHOUSSE & LAMIROY (2017)。

1. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE + de + MOIS >構文
2. <前置詞+冠詞+ PÉRIODE ((准) 接頭辞) + MOIS >構文
3. <PÉRIODE + MOIS >構文
4. <前置詞+ PÉRIODE + MOIS >構文

18世紀以前には個々バラバラに用いられていた *début*, *milieu* /mi-, *fin* は、構文化の過程を経て、3つの時期と12の月名のパラダイグムからなるスキーマ型の< PÉRIODE + MOIS >構文として、安定的使用に向かっている。概略、構文の変化は以下のように推移した。

オーソドックスな構文1は早い段階で消滅に向かった。特に *milieu* を含む場合に消滅が早く、mi- からなる構文2が優勢となった。次にmi-のアナロジーにより、*fin* と *début* の准接頭辞化（語彙的構文化）が起こり、構文2が全体的に増加した。*début* と *fin* の接辞化は完全ではなかったため、電報形式として以前から存在する< PÉRIODE + MOIS >が、副詞化（文法的構文化）した。構文2はmi-では保持されるのに対し、*début* と *fin* では構文3が優勢となった。Frantextのmi-では、構文2と構文3は均衡しているが、Le Mondeでは構文2が減少し構文3が増加している。構文3の優勢が続くことが予想できる。構文3は副詞化した複合語であるため、時間の副詞と同様に前置詞を付加して構文4を作ることでもできる（*dès mi-janvier*）。構文3は別の方向への拡張もでき生産的である（*dès début 15<sup>e</sup> s.*, *fin été*, *mi-2010* など）<sup>18)</sup>。

語彙素など単一の言語単位や *de* の脱落など単一の言語現象を追うのではなく、多量の実例に基づいて構文の変化の観点からの記述を行えば、言語の変化と言語の多様性は必然的に同時に記述されることになる。構文化の観点は通時的のみならず共時的研究においても有効であると言える。

(名古屋大学名誉教授)

---

18) 以下の例がある。インフォーマント（1名）からは、(c)はOKであるが、(a)と(b)は許容しにくいとの回答を得た。

(a) Cette nouvelle boisson sera disponible fin été 2016, dans plus de 500 enseignes Starbucks aux États-Unis. <https://www.meltyfood.fr/starbucks-le-nitro-coffee-arrive-et-ete-aux-usa-a532551.html>

(b) ... et alors il exprime, non plus la cause efficace, mais la concession, dès début 15<sup>e</sup> s. (MARCHELLO-NIZIA, C. (2009), Grammaticalisation et pragmatization des connecteurs de concession en français : *cependant, toutefois, pourtant*, *Revue Roumaine de linguistique*, 54/1-2, 7-21.)

(c) Démarré mi-2010, ce chantier de 490 millions d'euros doit se terminer à la fin de l'année. (LM2012)

[参考文献]

- 秋元実治 (2015) 「第 1 章, 文法化から構文化へ」秋元実治, 青木博史 & 前田満編『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房, 1-40.
- 秋元実治, 青木博史 & 前田満編 (2015)『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房.
- 天野みどり & 早瀬尚子編 (2017)『構文の意味と拡がり』くろしお出版.
- ARNAUD, P. J. L. (2015), “38. Noun-noun compounds in French”, P. O. MÜLLER, I. OHNHEISER, S. OLSEN & F. RAINER (eds), *Word-Formation*, Berlin, De Gruyter, 673-688.
- BOOIJ, G. (2010), *Construction Morphology*, Oxford, Oxford UP.
- BOOIJ, G. & HÜNING, M. (2014), “4. Affixoids and constructional idioms”, R. BOOGAART, T. COLLEMAN & G. RUTTEN (eds), *Extending the Scope of Construction Grammar*, Berlin, De Gruyter, 77-105.
- BRINTON, L. J. & TRAUGOTT, E. C. (2005), *Lexicalization and Language Change*, Cambridge, Cambridge UP.
- BYBEE, J. (2010), *Language, Usage and Cognition*, Cambridge, Cambridge UP.
- CROFT, W. (2001), *Radical construction grammar: syntactic theory in typological perspective*, Oxford, Oxford UP.
- FAGARD, B. & DE MULDER, W. (2007), “La formation des prépositions complexes : grammaticalisation ou lexicalisation ?”, *Langue française* 156, 9-29.
- FRADIN, B. (2009), “IE, Romance: French”. R. LIEBER & P. ŠTEKAUER (eds), *The Oxford Handbook of Compounding*, Oxford, Oxford UP, 417-435.
- FRANÇOIS, J. (2008), “Les grammaires de construction : un bâtiment ouvert aux quatre vents”, *Cahier du CRISCO* 26, 1-19.
- FUJIMURA, I. (2016), “Caractéristiques de « N1 N2 (épithète) » par rapport à « N1 de N2 » : Effet domino vs Effet de serre, Fin janvier vs Fin de janvier”, *Journée d'étude : Linguistique de la parole* (2016-01-30, Osaka).
- GOLDBERG, A. (2006), *Constructions at Work*, Oxford, Oxford UP.
- GOLDBERG, A. (2013), “Constructionist Approaches”, T. HOFFMANN & G. TROUSDALE (eds), *The Oxford handbook of construction grammar*, Oxford, Oxford UP, 15-31.
- GREVISSE, M. & GOOSSE, A. (2008), *Le Bon Usage, Grammaire Française*,

14<sup>e</sup> éd. Duculot / de Bœck.

- HOFFMANN, T. & TROUSDALE, G.(2013), “Construction Grammar: Introduction”, *The Oxford handbook of construction grammar*, Oxford, Oxford UP, 1-12.
- LAHOUSSE, K. & LAMIROY, B.(2017), “*C’est ainsi que*: grammaticalisation ou lexicalisation ou les deux à la fois ? ”, *Journal of French Language Studies* 27, 161-185.
- LEGALLOIS, D.(2016), “La Notion de Construction”, *Encyclopédie Grammaticale du Français*, en ligne : encyclogram.fr.
- LEGALLOIS, D. & PATARD, A.(2017), “Les constructions comme unités de la langue : illustrations, évaluation, critique”, *Langue française* 194, 5-14.
- NOAILLY, M. (1990), *Le substantif épithète*, Presses Universitaire de France.
- PICONE, M. D.(1996), *Anglicisms, Neologisms and Dynamic French*, Amsterdam, John Benjamins.
- TRAUGOTT, E. C. & TROUSDALE, G.(2013), *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford, Oxford UP.
- VAN WETTERE, N. & LAUWERS, P.(2017), “La micro-constructionnalisation en tandem : la copularisation de *tourner* et *virer*”, *Langue française* 194, 85-104.